17 駅前の電話ボックス

ある日、わたしは、しんせきの家に行き、つい帰りがおそくなった。銀行の時計は、もう六時になるところだ。冬なので、あたりはうす暗く、家に帰るとちゅうには、暗くてさびしい道があるので、家へ電話することにした。

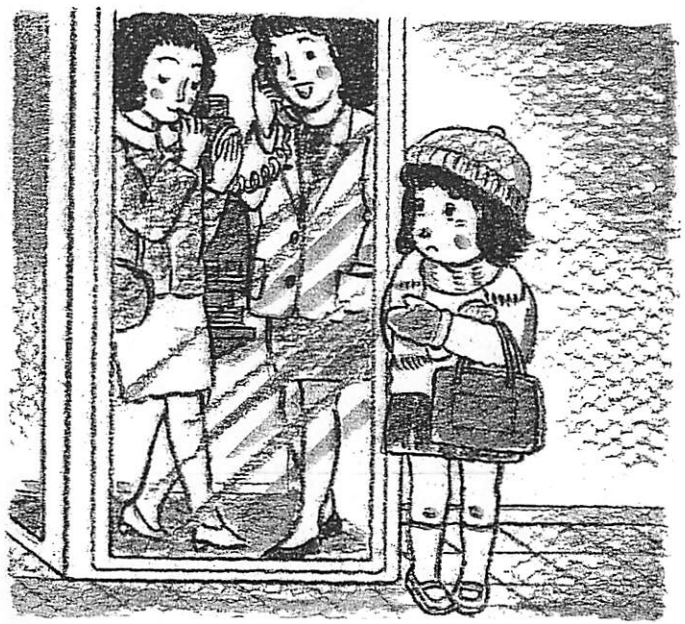
駅前の電話ボックスにくると、男の人が電話をしていたがすぐ終わったので、わたしが電話しようとドアに手をかけた。すると、若い女の人がいきなりはいってきて、さっさと電話をかけ始めた。「わたしのかける番なのに、ずるい人だ。」と思ったが、あっけにとられて何も言えなかった。しかたなしに外でまっていると、風がヒューヒューと吹きはじめ、身ぶるいするほどの寒さだった。

しばらくまったが、なかなか終わらない。いらいらしていると、その人の友だちだろうか、やはり若い女の人が電話ボックスに入って行って、さっきから

かけている人と交代し、前よりももっと長い話を始めた。こともあろうに、先にかけていた人は、中でおけしょうを始めた。

わたしは、順番をとられたうえに、寒さでふるえている人のことも考えず、しかも自分の家の電話みたいに一人じめしてと思うと、ますますはらがたってきた。

そこで、思わず電話ボックスのドアをノックしようとしたが、何となく気がとがめたのでやめてしまった。しかし、ついわたしの手は、ドアを強くノックしていた。その音で、女の人が、きっとわたしの顔をにらみつけたので、わたしも負けずににらみかえしてやった。



さあ、それからどのくらい続いたかわからないが、とうとうその女の人は、視線をそらしてしまい、二人はまた、話の続きを始めた。わたしは、もう待ちきれなくなり、ボックスのまわりをぐるぐるまわり始めた。

そのうちに、とうとう相手もわかってくれたのか、それともわたしにいやみを感じたのか、ガチャンとらんぼうに電話をきると、ドアをすごいいきおいでしめて出ていった。わたしは、ほっとして電話をすると、

「おそかったわね。今すぐむかえにいくからね。」

と、母のやさしい声がとびこんできた。

時計を見ると、もう六時をかなりすぎていた。

母がむかえに来るまでのあいだ、わたしはさきほどのできごとを思いだして、あれこれと考えてみた。

わたしは、今でもあの電話ボックスのできごとが、深く心に残っている。

18 神戸のふっこうは、ぼくらの手で

地しんのあったその日、一月十七日から、この学校がぼくたちの家になった。ぼくが学校に着いたときには、体育館や教室は、ひなんしてきた人たちでいっぱいになっていた。

「宮本くん、こっちだ。こっちにおいで。」

と、とつぜんぼくをよぶ声がした。向こうで大浜先生が手まねきしている。先生のおかげで、やっと体育館のすみにこしを下ろすことができた。寒さの中でぼくたちのひなん生活が始まった。

三日目の朝、一大事が起こった。便所に行くと、大便が便器に山もりになっている。ぼくは、とっさに大浜先生をよびに走った。

「大浜先生、来てください。」

17　駅前の電話ボックス

4－(1)　約束や社会のきまりを守り，公徳を大切にする心をもつ。
（規則尊重，公徳心）

1 主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

広く社会一般，あるいは人が多く集まる場所で，社会を構成する人間の一人として，守らなければならない規則・きまりがある。順番を守る，大声を出さないなどはその一例で，これが一般に公徳・公衆道徳といわれるものである。これを守ることで，人は一つの秩序に帰属し，互いに和やかに生活することができる。

そのためには，社会の成員として守るべきことを知り，その守るべきことにどんな根拠があるのかを知る必要がある。それを理解しないかぎり，どんな規則やきまりも，外からの強制としてか受け取れなくなる。それでは公徳に対する主体的なかかわりは生まれない。

〈子どもの実態について〉

子どもは，人の多く集まる場所で他人に迷惑をかけているのに気が付かない場合がある。また，気が付いていても，周囲の人に気を配るより，自分にとって都合がよければそれでよいという考えをすることもある。

公徳について十分に考えさせ，社会の成員としてなすべきことは何かに目を向けさせることが必要である。

〈資料について〉

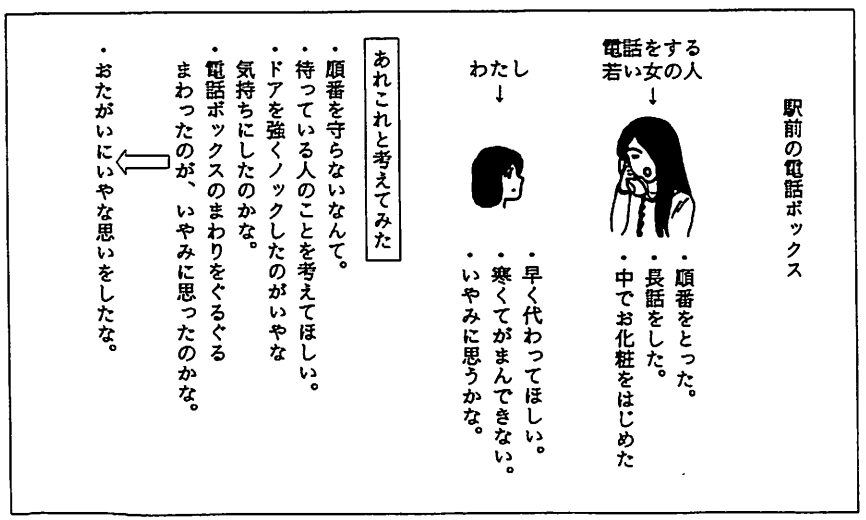
公衆電話で，わたしが若い女の人に順番をとられる。若い女の人は長電話をし，そのうえに友達と交代して，中でお化粧をはじめる。寒い北風にふるえ，早く家に連絡したいというあせる気持ちが一段とわたしをいらだたせたのである。

わたしが，母が迎えに来る間「あれこれ考えたこと」は，もちろん，他人のことを考えない若い女の人に対する非難である。けれども，自分はどうすればよかったかなど，振り返って考えている点にも気付かせたい。相手の自分勝手な行動を非難する自分が，逆に相手にも不快や嫌悪感を与えていなかったかという考え方が公徳心を育てるために大切である。

2 ねらい

公徳について理解し，それを大切にしようとする心情を育てる。

□板書



3 展開

学　習　活　動	支援上の留意点
(1)　公共物を自分の物のように使っている人を見た経験について話し合う。	・　ねらいとする価値にかかわる意識がもてるようにする。
(2)　資料を読んで，わたしの考えや行為について話し合う。	
①　わたしは，若い女の人のどんな行動に腹をたてたのでしょう。 ・順番をとった。 ・長話をした。 ・友達と交代して中でお化粧をはじめた。 ・寒い夜空でまたされた。	・　若い女の人のしたことについて考えることにより公徳が守れていないことをとらえることができるようにする。
②　ドアを強くノックしたとき，わたしはどんな気持ちでしょうか。 ・母が心配しているだろうと，急いでいた。 ・早く代わってほしい。 ・寒くてがまんできない。 ・いつまで話をしているんだ。 ・若い女の人が，いやみに思うかな。 ・いやな気持ちになるかな。	・　若い女の人への怒りだけでなく，気もとがめていることからその理由を考えることができるよう助言する。
③　わたしが，母がむかえに来るまでのあいだ，あれこれと考えてみたことはどんなことでしょう。 ・順番を守らないなんてひどすぎる。 ・自分の家の電話みたいに，公衆電話を使うのはいけない。 ・電話ボックスの中で化粧をするのはひどい。 ・待っている人のことを考えないのは，ひどい人だ。 ・ドアを強くノックしたのがいやな気持ちにしたのかな。 ・電話ボックスのまわりをぐるぐるまわったのが，いやみに思ったのかな。 ・おたがいにいやな思いをしたな。	・　わたし自身のこと，若い女の人のことなどそれぞれの立場に立って考えることにより，多様な感じ方や考え方が出せるようにする。
(3)　自分たちの生活について振り返る。 ○　学校，乗り物，道路その他の公共の施設で，今まで，みなさんがしてきたことについて話し合いましょう。 ・学校でボールをみんなで仲よく使っている。 ・バスに乗るときに，ならんで乗った。	・　自己の生活を振り返ることにより公徳を大切にしようとする意欲を高められるようにする。
(4)　教師の話を聞く。 ○　列車の中で席を譲った小学生があるんですよ。	・　望ましい事例を紹介してしめくくる。